



恵美子が九十九に従うと決めた日から一ヶ月が過ぎた。

清水加夏子と堀川殉、二人が近づく事のないよう病院内での動きをそれとなく見張り、距離を開ける。広い施設とは言え、限られた範囲でそれを実行するには恵美子一人では難しかった。

あの日…

ひとしきり泣きじゃくった後で彼女は、事情を話し銀さんに協力を頼んだのだった。

◇

「気が乗らねえよ、いくらエミちゃんの頼みでも、そいつぁチョットなあ…」

「駄目、ですか？」

泣き腫らした目で恵美子は銀さんを見上げた。

「そんな目で見るとなよ。ただでさえこんな所でオイオイ泣かれて抱きつかれて、オマケにそんなすがりつく目でお願いなんかされてるのを誰かが見たら、絶対にオレたち何かあったって誤解されちゃうじゃないか」

むず痒い顔をして銀さんが言った。

「意外だな、銀さんってそんな事、あんまり気にしないかと思ってた。私、無理なお願いしてるって判ってます。でも、こんなこと話せるの銀さんしか居なくて」

「そりゃな、『患者を見張れ、気付かれぬように隔離？しろ』なんて、エミちゃんにしたら嫌だったろうよ。いつも誰に対しても一所懸命だからな。治療の為とはいえ、九十九先生も酷な事を言いつけやがる」

恵美子は全てを打ち明けた訳ではなかった。

この密約に、彼女自身の意志もまた加わっている事を。

そしてそれが、看護師としての矜持と責めぎ合っている事を。

「気は進まねえ、進まねえが… 今日のような出来事がこの先も続くなら、さしもの王子さまもただでは済むまい。それでも諦めるような奴じゃないし。ここは先生の言う通りにするべきなのかも知れないな」

ハアとひとつ溜め息をつき、銀さんは恵美子の肩をポンと叩いた。

「協力するよ。どれだけの事が出来るかは判らんがね」

「…アリガトウ、銀さん」

両手を揃え、恵美子は深々と頭を下げた。

よせやいと頭を搔いて、銀さんがヒラヒラと手を振りながら言った。

自分も正直、あの子たちとどう接していいのか判らないんだと。

◇

クリスマスも近くなったそんなある日、小児病棟に入院してきた少女がいた。

この子の存在が、凍りついた殉と加夏子の歯車を再び回し始めるとは、まだ誰も気付いていなかった。

◇

年が暮れ、年が明けた。

清水加夏子は、彼女を取り巻く環境ともども何一つ変わらぬまま、冷たい春のただ中に居た。
相変わらず突発的な暴力を振るう彼女を医者も看護師も忌避し、今では誰も積極的に関わろうとしない。
主治医の九十九と担当看護師の恵美子、そしてリハビリトレーナーの銀さんだけが彼女と接し続けていた。

それぞれが異なる動機から。
異なる思惑から。

彼らに共通しているのは、それが加夏子の為でなく自分の、もしくは自分の大事な人間の為だという事だけだった。

加夏子は孤立無縁だった。
例えそれが、自ら招いた事態であったとしても。

◇

「フウ〜…」

夕日が朱々と染め上げた病院の中庭、人影の途絶えたエントランス脇のベンチに長々と軀を伸ばした銀さんは煙草の煙を夕暮れの空に向かって吹き上げた。
ここ暫くの間に、澱のような疲労が軀の底に溜まってきているのを感じていた。

こんな事をしているからだ、茜空にボヤクかのように銀さんはひとりごちた。

恵美子の涙にほだされて、加夏子と殉をさりげなく遠ざけるよう腐心しながら今日まで来たが、これが本当に治療になっているのだろうか？

坊やだって馬鹿じゃない

ましてやあの子には他人の心の声を聞き取る特別な力がある

俺達の考えている事など、とうの昔に知っているだろう

それでも尚、あのお嬢に自分が何をしてやれるのかを必死で探していやがる

俺は何をしている？

何をしてやれる？

わからねえよ

袋小路だ

萎え切った心を抱えた銀さんには、今の状況と自分自身を呪うしか術が無かった。

九十九…

あの若造、いったい何を企んでやがる…

その時ふと唄が聞こえてきた。わらべ唄だった。

とお～りゃんせ と～りゃんせ

ベンチから身を起こした銀さんの目に、小さな女の子の姿が映った。
毬の替わりだろうか、サッカーボールを右手でつく幼女の影が長く伸びている。
左手の袖には中身が無い。
去年、入院してきた娘だった。
名前は確か…

「みーちゃん」

銀さんはその子の呼び名を口にした。
無心にサッカーボールをついていた少女がこちらを向くと、満面の笑みで応える。

勘のいい子だ、もしかするとこの子も…

そんな事を考えながら、銀さんはベンチから身を起こした。

「こんにちは、おじちゃん」

歩いてくる銀さんに、少女はペコリと頭を下げた。

「もう暗くなるぞ、そろそろ病室に帰らなきゃなあ」

「でも、もうちょっとだけ… 一緒にやろうよ」

銀さんの頬が崩れた。

「あのなあ、日が暮れると怖あ〜い鬼がうろつきだすんだぞ。俺はまだ鬼に食われたくねえよ」

ガシガシとショートカットの頭を乱暴に撫でる。

「へいきだよ、ウチ、ひとより食べるとこ少ないモン♪」

銀さんの手が止まった。

「ねえ遊ぼう、もうチョットだけ。ネッ」

銀さんの戸惑いを、少女の無邪気な笑顔が遮る。

「……よし、遊ぶか」

「やったあ！！」

「いいか、チョットだけだからな」

「うんっ」

器用に片腕でボールを拾う姿を眺めながら、銀さんは少女がここへ来た時の事を思い出していた。

名前は佐野 碧。

歳は確か10歳くらいだったか。

小学校4年生だと聞いていたから、それ位であろう。

随分、回復したものだ。

年の瀬も近い都心の私鉄線で昨年起こった大規模な脱線・転覆事故。

死者約130名、重軽傷者300名以上という大事故の、彼女は被災者の一人だった。

頭部打撲、片腕切断の重傷患者として救急搬送されてきたのだったが、助からなかった被災者も数多くいた。

この娘はまだ運がいい方だ、腕一本無くすだけで済んだのだから

彼が直接関わったのは僅かな時間でしかなかったのだが、気にかけていた時間はそれよりも多かった。

彼女の両親は二人とも、その時に亡くなっている。

こんな小さな子がこれから、たった一人でどうやって生きてゆくのだろう

痛ましい思いに捉われながら、ふと街灯の下の影に気がついた。

暴れ出す前の、アノ怖い顔をした加夏子だった。

マズイぞ…

「みーちゃん、戻る時間だ」

「え～もう～」

「ホラ、あのおねえちゃん怖い顔してるだろう？ 約束守らない悪い子がいるとね、あのおねえちゃん、ホントに鬼み
たいに怒っちゃうんだぞ」

碧がぐるりと振り向き加夏子を見る。

不思議そうな顔で言った。

「…あのおねえちゃん…泣いてる…」

銀さんはギクリと身を強ばらせた。

「泣いて…いるって？」

半端な中腰のまま、銀さんは加夏子の姿に釘づけとなっていた。

背を伸ばし、ジッとこちらを見つめている加夏子の額には、深い一筋の皺が刻まれている。

険を宿す眼差し。

両の手がゆっくりと車椅子のホイールを回す。

狂的な力を秘めているとはいえ所詮は女の子の腕力、暴れたとしても抑え込めない事はない。

今までも何度か、彼女の暴発を止めた事はあった。

でも銀さんは、加夏子にこれ以上騒ぎを起こして欲しくはなかったし、何より彼女のあんな姿を見たくはなかったのだ。

だが今、碧が言った『泣いている』とは一体…

ゆっくりと、車椅子が二人の方へ近寄る。

銀さんは加夏子の視界から碧を覆い隠すようにして二人の間に立ちはだかった。

「よう、詩集を読むにはチト遅い時間だな、嬢ちゃん」

「…こんばんは、久我さん…」

加夏子の口調が、あの夜の紗季子…加夏子の母親のそれに酷似しているような気がして、銀さんは言葉が続かなくなってしまった。

彼女が知る筈の無い、彼と、彼女の母親の過去を見透かされたような、そんな気分になってしまったのだ。

ワタシは知ってるの

あなたが隠していること

あなたがやってきたこと

何もかも

瞬かぬ眼差しを受け続ける銀さんは、額から汗が浮き出るのを感じていた。

「こんな時間に、そんな怪我人を遊ばせておいていいのかしら？」

「……………」

「いい加減ね、あなたも。この病院も。胸が悪くなる」

「おねえちゃん、おじちゃんを叱らないで。ウチが遊ぼっていったんだよ」

碧が銀さんの後ろから顔を覗かせて言った。

加夏子の目がつり上がる。

「ガキは黙ってる！」

いきなり膝の詩集を投げつけてきた。

凄まじい勢いで宙を飛んだ詩集は銀さんに命中し、バラバラにちぎれ飛んだ。

「おいっ、よせ！」

銀さんが加夏子を押さえつけようとした時だった。

「おねえちゃんだって、あんな暗い所でエンエン泣いてたじゃん！ おとなのくせにカッコわるいよ！ ウチちゃんと聞こえたんだからね！！」

「ワタシが…泣いて…？」

加夏子の動きが止まった。

「そうだよ、ウチ聞こえたもん」

銀さんの後ろに隠れたままの碧が言う。

「うるさい位え～んえ～んて、すごく気になったよ」

「嘘よ」

「ホントだもん！」

「うそっ！」

「ホントだもんっ！！」

むきになって碧にくっつかかる加夏子。

これまたむきになって言い返す碧。

妙な展開に、銀さん一人が置いてけぼりとなっていた。

二人の女の子に挟まれた形の彼は、出した手のやり場に困ったあげく、両手で頭をかきながら顔をしかめる位しかやる事がなかった。

どうなってるんだい、こりゃあ

だが彼は二人の間を離れなかった。

確かに、先程の殺気じみた険しさは加夏子の表情から消えていた。

今はそう…まるで姉妹の口喧嘩といったところであろうか。

油断は出来ない。いつまた彼女が爆発するか、彼女自身ですら判りはしないのだ。

それでも、銀さんは加夏子の様子が今までと何か違うようで、それが何処とはなく好ましいと感じ、二人が喚き合うに任せておいたのだった。

そういえば、前はよくあの坊やと一緒にいる時、こんな風にふくれっ面してたよな

殉の事に思い当たった瞬間、目の前の光景に忘れていた疑問が再び銀さんの脳裏に浮かび上がった。

聞こえた…って、言ってたよな？

俺には何にも聞こえなかったぞ

あの時、加夏子はキレそうな顔でジッとこちらを見ていた

俺も気が付いたが…

声ひとつあげていなかったぜ

もしかして、この娘…本当に…

「なによこのコ！ もうっ！」

「へーんだ、イジっぱり！」

「なんですって！？」

いつの間にか銀さんの前に回り込んでいた碧に向かい、加夏子が勢いよく右手を振り上げた。

しまった！！

ぺしっ

加夏子の掌が、髪がめくれた碧のおでこを弾いた。

「なまいき言う子はおしおきだからねっ」

「いったぁ〜…」

大袈裟に額を両手で押さえてみせた碧が、指の間から加夏子を覗いてペロリと舌を出す。

つられて加夏子が微笑み、やがて声を上げて笑いだした。碧もケラケラと笑い出す。

加夏子が笑っている…

痺れるような想いで銀さんは彼女の声を聴いた。

初めて聞く、加夏子の笑い声だった。

◇

「笑っていた？ 彼女が」

「はい」

デスクに向かい忙しくカルテに目を通して九十九医師が椅子ごと恵美子に振り返った。思い切り背中を丸め、猫科の動物のように恵美子の顔を視線で舐めあげる。嫌悪感が蟻の大群となって背筋を這い上ってくるのを感じ、恵美子は小さく身震いをした。

「フフゥ〜ン… なかなか面白い。子供、か。そう来たか」

ネットリと笑う九十九の顔は、恵美子でなくともいやらしいと感じたであろう。

「やけに楽しそうですね、先生。子供との交流が心を開くきっかけになるなんて、ありふれた話なのではないですか？」

皮肉を込めて恵美子は聞いた。

「ありふれた経緯じゃつまあ〜んないかな、エ〜ミちゃんはさあ〜」

黄色がかった眼球が容赦無く視線をまわりつかせてくる。変質者じみていた。

「そんなつもりじゃ…」

「まあいって。君の関心はあの娘じゃなくて、彼女のボーイフレンドの方なんだからさあ」

恵美子は顔が怒気をはらむのを感じた。看護師としてのプライドを、今の九十九の言葉は酷く傷付けていた。だがその指摘は…間違っていない。

「それにしても早かったな」

「何が、でしょう」

「ガードを下げ始める時期がだよ。決まってるじゃん！」

まだ判らないのかと言わんばかりの言い種であった。清水加夏子が自ら封印した心…九十九は『棚上げ』と表現していた…を再び開け放つそのタイミングを、彼と恵美子は息を殺すように待ち続けてきたのだ。

「納得出来ない点はあるが、チャンスだ。もう少し様子を見てアレを仕掛けてみよう」

九十九の目の澱みが硬玉の鋭い光に変わる。眠り猫から、獲物を得た虎の目へ。

ゴクリと唾を飲み、恵美子が頷く。

彼女もまた、自分の成すべき事を思い描いていた。